

看護科学生にとって対応がむずかしい患者像

川崎医療短期大学 第二看護科

塚原 貴子 宇野 恵子

(平成5年8月23日受理)

Character of Difficult Patients for Nursing Students

Takako TSUKAHARA and Keiko UNO

Department of Nursing

Kawasaki College of Allied Health Professions

Kurashiki, Okayama 701-01, Japan

(Received on Aug. 23, 1993)

Key words : 援助関係, イメージ, 看護科学生, 臨床実習, 患者像

概 要

看護科学生が臨床実習中に、患者との援助関係を形成する過程で、どのような患者に対応が「むずかしい」と感じているのかを、患者の年齢・性別・病状・イメージの視点から検討した。

看護科学生の61%が臨床実習中に対応が「むずかしい」と感じる患者を受持っていた。患者の性別比率には、有意の差はみられなかったが、年齢別比率では、高齢者の割合が有意に高く、病状別では、「慢性期」の割合が有意に高かった。学生にとって対応が「むずかしい」と感じた患者のイメージは、「頑固」「わがまま」が上位を占め、「頑固」は「寝たきり」、「わがまま」は「手術後」「合併症のある」に、「無口」は「予後不良」の患者に多かった。また、「頑固」は50歳以上が、「わがまま」は0～19歳が他の年齢に比して有意に高かった。対応が「むずかしい」と感じたきっかけ、理由としては、「患者から拒否された」が他に比して有意に高かった。

はじめに

看護科学生は臨床実習で、健康に障害をもっている人に対して看護を実践でき、またその家族に適切に対応できる能力を養っている。その看護実践能力は、主として患者との関係を通して身につけてゆく。

患者一看護者関係を発展させていく段階では、順調にいくときばかりではなく、さまざまな感情を体験することもしばしばあるであろう。健康障害によって厳しい状況にある患者や年齢差のある患者との関係に、戸惑いを感じることもよくあると思われる。

従来、看護婦には、患者に対して「むずかしい」「苦手だ」などの否定的な感情を表出してはいけないという思いがある。このことには異論

はないが、ただ無条件に抑圧するのではなく、そういう感情を抱いたということを事実として受け止め、その感情を看護の展開に活用することが専門看護婦として重要ではないかと思われる。

そこで、本学看護科学生が実習中にどのような患者に対して対応が「むずかしい」と感じたのかを調査し、よき患者一看護者関係の発展をはかるための資料にしたいと考えた。

I. 方法および対象

調査対象は、本学の臨床実習終了後の看護科学生106名（第一看護科57名、第二看護科49名）で、年齢層は19～22歳であった。調査期間は、平成3年12月12～19日の間である。調査方法は、質問紙法（自由記述式）により、無記名で回答

表1 「むずかしい」と感じた患者の病状

患者の状態	人 (%)	χ^2 検定*
慢性期	27(42.2)	a
急性期	11(17.2)	b
手術後	11(17.2)	b
合併症がある	11(17.2)	b
回復期	10(15.6)	b
予後不良	9(14.1)	b c
寝たきり	8(12.5)	b c
手術前	4(6.3)	b c d
増悪期	3(4.7)	c d
終末期	3(4.7)	c d
教育入院	2(3.1)	d
その他	7(10.9)	—

注 重複回答, *:異なるアルファベットを付した群間に有意の差を認める。p<0.05

表2 「むずかしい」と感じた患者のイメージ

患者のイメージ	人 (%)	χ^2 検定*
頑固	25(39.1)	a
わがまま	25(39.1)	a
無気力	14(21.9)	b
無口	13(20.3)	b
不潔	8(12.5)	b
依存的	2(3.1)	c
落ち着かない	1(1.6)	c
怖い	1(1.6)	c
その他	18(28.1)	—

注 重複回答, *:異なるアルファベットを付した群間に有意の差を認める。p<0.05

を求めた。回収率は100%であったが、有効回答は105名99%であった。

II. 結 果

1. 受持ち患者に対して対応が「むずかしい」と感じた学生の割合

臨床実習中、受持ち患者に対して、対応が「むずかしい」と感じた学生は、105人中64人(61.0%)であった。

なお、2人以上の患者に対して「むずかしい」と感じた学生もいたが、以下の項目の回答は最

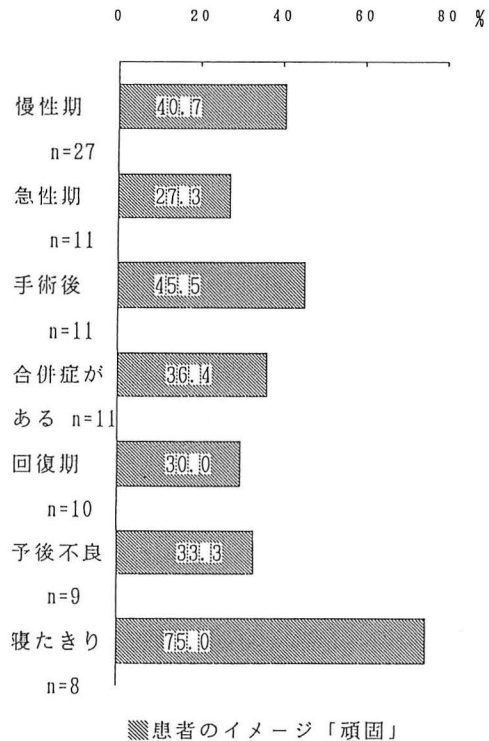


図1 患者の病状別に見た患者のイメージ「頑固」

も強く印象に残った患者1名に限定したものとした。

2. 対応が「むずかしい」患者の特徴

まず、男女比率をみると、男性34人(53.1%)、女性30人(46.9%)で、有意の差はみられなかった(p<0.05)。

次に、年齢別でみると、0~18歳が6人(9.4%)、19~50歳が21人(32.8%)、51歳以上が37人(57.8%)で、3群間には有意の差が認められ(p<0.05)、51歳以上>19~50歳>0~18歳であった。

また、対応が「むずかしい」と感じた患者を病状別にみると(表1)(重複回答)、「慢性期」が27人(42.2%)、「急性期」「手術後」「合併症がある」が共に11人(17.2%)、「回復期」が10人(15.6%)、「予後不良」9人(14.1%)、「寝たきり」が8人(12.5%)、「手術前」4人(6.3%)、「増悪期」「終末期」が共に3人(4.7%)、「教育入院」2人(3.1%)、その他は7人(10.9%)

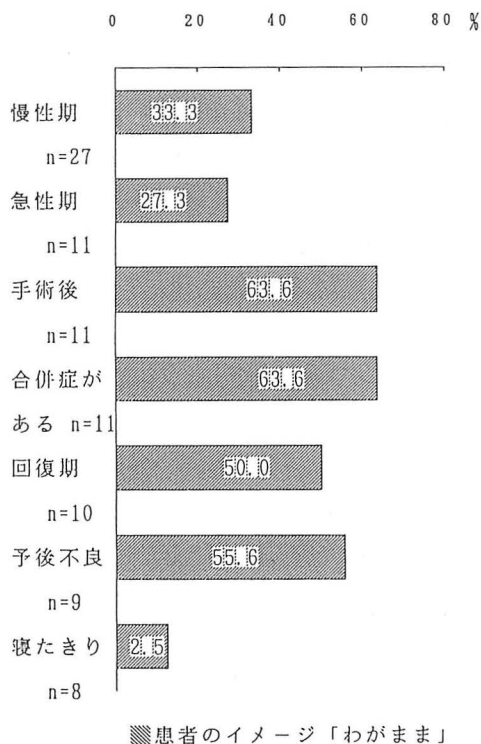


図2 患者の病状別にみた患者のイメージ「わがまま」

%)で、「慢性期」が他の病状に比して有意に高かった ($P < 0.05$)。

学生にとって対応が「むずかしい」と感じた患者にどのようなイメージを持ったか自由記載で質問した結果をみると(表2)(重複回答)、「頑固」25人(39.1%)、「わがまま」25人(39.1%)、「無気力」14人(21.9%)、「無口」13人(20.3%)、「不潔」8人(12.5%)、「依存的」2人(3.1%)、「落ちつかない」「怖い」が共に1人(1.6%)、その他18人(18.1%)で、「頑固」「わがまま」が他のイメージに比して有意に高かった($P < 0.05$)。

次に、学生が対応が「むずかしい」と感じた患者に対するイメージの代表的な「頑固」「わがまま」「無気力」「無口」とその患者の病状との関係を見た。

「頑固」についてみると(図1)、「寝たきり」での「頑固」の占める割合は、75.0%、「手術後」では45.5%、「慢性期」では40.7%であり、他の

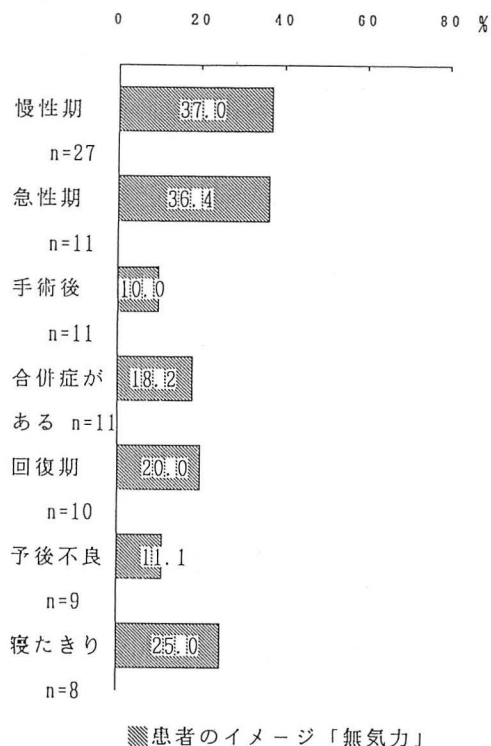


図3 患者の病状別にみた患者のイメージ「無気力」

病状に比べて「寝たきり」の状態のときに「頑固」の比率が高い傾向がみられた。

「わがまま」についてみると(図2)、「手術後」、「合併症がある」での「わがまま」の占める割合は共に63.6%、「予後不良」では55.6%で上位を占めた。

「無気力」についてみると(図3)、「慢性期」での「無気力」の占める割合は37.0%、「急性期」では36.4%、「寝たきり」では25.0%であった。

「無口」についてみると(図4)、「予後不良」で「無口」の占める割合は44.4%、「急性期」では27.3%、「慢性期」では25.9%であり、他の状態と比べ「予後不良」での「無口」の占める割合が高い傾向がみられた。

次に、対応が「むずかしい」と感じた患者に対するイメージの代表的な「頑固」「わがまま」「無気力」「無口」と患者の年齢との関係を見ると、「頑固」は(図5)、51歳以上が59.5%と他の年齢と比べて有意に高かった($P < 0.05$)。ま

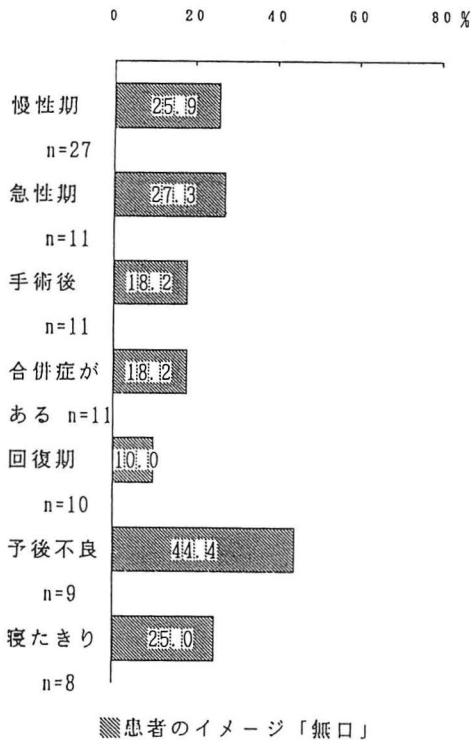


図4 患者の病状別に見た患者のイメージ「無口」

た、「わがまま」の占める割合は(図6)、0~18歳が100%と他の年齢と比べて有意に高かった ($P < 0.05$)。「無気力」と「無口」では、年齢別での特徴的な関係はみられなかった。

3. 対応が「むずかしい」と感じたきっかけ・理由

学生が受持ち患者に対応が「むずかしい」と感じたきっかけ・理由としては、「患者から拒否された」が25人(39.1%)で、他に比して有意に多かった ($P < 0.05$)。次いで、「看護婦から患者の嫌な面を聞いた」が9人(14.1%)であった。その他としては、「会話が続かない」、「どう接してよいかわからない」、「患者の考えていることが理解できない」などであった。

III. 考 察

1. 受持ち患者に対して対応が「むずかしい」と感じた学生の割合
今回の調査で、受持ち患者に対応が「むずか

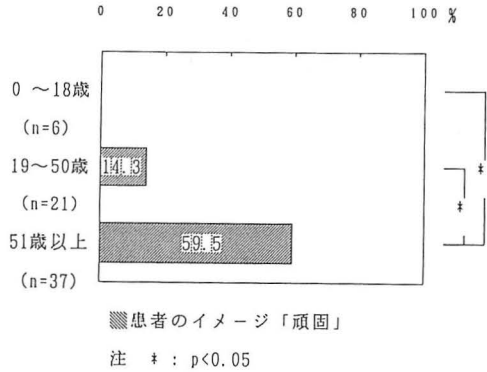


図5 患者の年齢別に見た患者のイメージ「頑固」

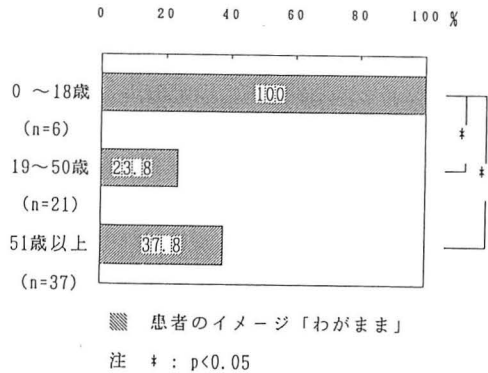


図6 患者の年齢別に見た患者のイメージ「わがまま」

しい」と感じたことのある学生は、61%に達している。篠崎ら¹⁾は、学生と患者との関係の位相判定での調査結果について、対象学生の23名中12名は患者と援助関係を形成したが、残りの11名(48%)は形成していなかったと報告しており、本報の結果と近似している。

多くの看護科学生が、援助関係を形成することに困難を感じ、患者との対応で「むずかしい」と感じている場合があることを指導者は留意すべきである。

2. 対応が「むずかしい」患者の特徴

対応が「むずかしい」と感じる患者の性別比率には有意の差は見られなかったが、年齢別では51歳以上の率が有意に高く、病状別では「慢性期」が27人(42.2%)で最も多かった。

平成3年度の年齢階級別受療率²⁾をみると10~14歳で最も低く、年齢が高くなるにしたが

って高くなっている。また、傷病別受療率では、感染症および寄生虫症が低下して、精神障害や循環系の疾患など慢性疾患が増加している。こうしたことから、学生は高齢で慢性疾患の「むずかしい」と感じる患者を受け持つ機会はますます増すであろう。

学生にとって対応が「むずかしい」と感じる患者のイメージ「頑固」は「寝たきり」に、「わがまま」は「手術後」「合併症がある」に、「無口」は「予後不良」に多いという結果から、患者の欲求や訴え方には病状に左右される、類似した傾向があるのではないかと考えられる。

学生が「むずかしい」と感じる患者のイメージを年齢別にみると、「頑固」の割合が51歳以上で有意に高く、「わがまま」の割合が0～19歳で有意に高かった。

老人が「頑固」、小児が「わがまま」であるということはそれらの者の一般的な特徴と学生は理解していると思われるが、臨床場面で患者として実際に遭遇すると、それを受け入れることが出来ずに「むずかしい」と感じてしまうのではないだろうか。現代の学生は兄弟姉妹が少なく、核家族で育てていることから子供や老人に接する機会が少ないと考えられ、そのため実際場面では困惑していると考えられる。

3. 対応が「むずかしい」と感じたきっかけ・理由

受持ち患者との対応が「むずかしい」と感じたきっかけや理由として、「患者から拒否された」が39.0%で他に比して有意に高かった。そして「むずかしい」と感じた患者に対して抱いたイメージは「頑固」「わがまま」が有意に高かった。

対応が「むずかしい」と感じたきっかけや理由として「患者から拒否された」は、その結果金子³⁾が述べている「反射的対応」を引き起こしていると考えられる。「反射的対応」とは、「愛には愛が、憎しみには憎しみが、肯定的感情には肯定的感情が、否定的感情には否定的感情が反射的に生起するという原則」³⁾であるが、学生は「患者から拒否された」ことによって、その拒否が刺激となって「むずかしい」と感じていると考えられる。この、「反射的対応」について、金子⁴⁾は「世間一般の日常生活のなかで常に起こっている現象である。しかし、患者が建設的な

人格変化をもたらす条件のひとつとしては、自明の現象として放置できない」とし、「反射的対応」の自覚と克服が要請されると指摘している。学生が患者との対応で「むずかしい」と感じた場合、それを、援助的な関係を作るきっかけとするように指導者は、学生の感情を否定せず、学生の気づきの場になるよう働きかけることが必要であると考えられる。

さらに、理由・きっかけのその他の内容に「会話が續かない」「どう接してよいかわからない」「患者の考えていることが理解できない」などがあるが、これらはコミュニケーションが円滑にいかないことに関係している。学生は、コミュニケーション技術が未熟であるため患者との関係がとれず、患者を「むずかしい」と感じる傾向があるのではないかと考えられる。

以上の得られた結果は、看護科学生が臨床実習中に患者と援助関係の形成をはかるに当たって活用できると考える。

ま と め

1) 看護科学生の61%が臨床実習中受け持ち患者に対して、対応が「むずかしい」と感じていた。

2) 対応が「むずかしい」と感じる患者の性別比率には有意の差は認められなかったが、年齢の高い者の割合が有意に高く、病状では「慢性期」の割合が有意に高かった。

3) 対応が「むずかしい」と感じる患者のイメージは「頑固」「わがまま」が他に比して有意に高かった。

4) 患者のイメージ「頑固」は病状の「寝たきり」に、「わがまま」は「手術後」「合併症がある」に、「無口」は「予後不良」で多かった。

5) 患者のイメージ「頑固」は51歳以上に、「わがまま」は0～19歳が他の年齢に比して有意に高かった。

6) 対応が「むずかし」と感じるきっかけ・理由としては「患者から拒否された」が39.1%で、他に比して有意に高かった。

謝 辞

稿を終えるにあたり、統計処理およびご助言ご指導頂きました本学第一看護科酒井恒美教授

に深く感謝致します。また、ご協力くださいました第二看護科の学生の皆様に、深く感謝いたします。

文 献

- 1) 篠崎きよ：学生と患者との関係を測定するための基準の作成(その2)―基準に基づく学生と患者との関係の実態と関係形成に影響を及ぼす要因―, 第20回日本看護学会集録(看護教育), 54-56(1989)
- 2) 厚生統計協会：国民衛生の動向, 1992年, PP83-84, 厚生協会, 東京(1992)
- 3) 金子靖：人間関係の基礎その1―対応と矛盾―, 神奈川県立衛生短期大学紀要 Vol. 8, 25-27(1975)